

■ 平成11年度事業概要 ■

I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業

寄附行為第4条第1号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 寄贈資料受入れ総数（図書・雑誌及び特別資料） 4,383点
- 購入図書・雑誌 1,269点
- その他の購入特別資料 485点
- レプリカ作成・VTR、テープ、CD 3点

（別掲の統計・資料編資料編「資料収集状況」欄参照）

整理・保存 カード作成及び収蔵資料のコンピュータ入力並びに収蔵資料の寄贈・寄託目録作成等
閲覧 利用者 延べ3,266人

II 文学に関する展覧会・文芸講演会等の開催事業

寄附行為第4条第2号に掲げる事業は、次のとおり行った。

1 展覧会事業

(1) 常設展「北海道文学の流れ」

会期 通年
会場 北海道立文学館常設展示室
入場者 9,736人

展示の構成・内容は開館当時のものを踏襲しているが、昨年度の「北海道の詩」コーナーの展示替えに続き館の新収蔵資料、未公開資料などを順次公開していく特設コーナーを常展室内に設置し、小林多喜二「故里の顔」自筆原稿、本庄陸男新資料などを公開した。

以下に、展示編成の基本を掲げておく。なお、〔 〕内は監修者名を示す。

〈札幌農学校と有島武郎〉〔高山亮二〕

このコーナーでは、ウィリアム・S・クラークの事蹟によって広く知られている札幌農学校（現、北海道大学。明治9年開校）の存在と活動を紹介するとともに、その農学校に学び、のちに母校の教壇に立って多くの後進を育成し、文学者・思想家として日本近代史に刻まれる仕事を残した有島武郎について、内村鑑三、新渡戸稲造、森本厚吉、ティルダ・ヘックらとの交流を含め、通算12年間にわたる本道在住期の足跡を概観した。

〈北海道文学の流れ—明治・大正期〉〔木原直彦〕

このコーナーで取り上げた主な文学者・関連人物名、事項名は次のとおりである（以下同）。

* 「空知川の岸辺」国木田独歩

国木田独歩、佐々城信子

* 開拓期を彩る作家群

岩野泡鳴、幸田露伴、長田幹彦、島崎藤村、葛西善蔵、徳富蘆花ほか

* 漂泊の人・石川啄木

石川啄木、石川節子、橋智恵子、野口雨情ほか

* 有島武郎をめぐる人々

有島武郎、有島生馬、里見淳、武者小路実篤、志賀直哉

* 道産子作家誕生

武林無想庵、岡田三郎、森田たま、中戸川吉二、中村武羅夫、子母沢寛、素木しづ、長谷川海太郎

* 同人雑誌群

「路上」「路傍人」「君影草」「白夜」「歩み」ほか

* 来道作家の足跡（大正期）

文学地図（足跡図）—吉屋信子、宮本百合子、橘外男、宮沢賢治、宇野千代、長田幹彦、久米正雄ほか

〈北海道文学の流れ—昭和前期〉〔西村信〕

* プロレタリア文学の潮流

葉山嘉樹、小林多喜二、久保栄、小熊秀雄、島木健作、本庄陸男ほか

* 若い詩人の肖像

伊藤整、川崎昇ほか

* 来道作家の足跡（昭和前期）

芥川龍之介、里見淳、鶴田知也ほか

* 農民文学の世界

吉田十四雄、辻村もと子、板東三百、早川三代治、坂本直行ほか

* 戦時下の文学

林容一郎、中津川俊六、八木義徳、寒川光太郎ほか

〈北海道文学の流れ—昭和後期〉〔神谷忠孝〕

* 戦後文学の展開

風巻景次郎、武田泰淳、宇野親美、中沢茂、澤田誠一、木野工ほか

* ささまざまな座標Ⅰ

船山馨、亀井勝一郎、八木義徳、和田芳恵、長谷川四郎、李恢成、重兼芳子、高橋揆一郎、小檜山博ほか

* 旋風をおこした作家たち

原田康子、三浦綾子、渡辺淳一

* ささまざまな座標Ⅱ

荒巻義雄、藤堂志津子、佐藤泰志、川又千秋、佐々木讓、土居良一ほか

* 来道作家の足跡（昭和後期）

福永武彦、戸川幸夫、新田次郎、水上勉、開高健、大江健三郎ほか

* 活躍する作家たち

三浦清広、加藤幸子、沖藤典子、久間十義、見延典子、辻仁成、谷村志穂

〈北海道の詩〉〔永井浩〕

* 草創期

児玉花外、高村光太郎、三木露風、宮沢賢治、北原白秋

* 生成期

更科源蔵、吉田一穂、左川ちか、猪狩満直、鈴木政輝、加藤愛夫、和田徹三ほか

* 戦争と詩

百田宗治、今井鴻象、鷺巣繁男、三谷木の実、牧章造ほか

〈北海道の短歌〉〔田村哲三〕

* 北海道歌壇の動き

山下秀之助、酒井広治、小田観螢、中城ふみ子ほか

* 来道歌人

斎藤茂吉、与謝野寛、与謝野晶子、斎藤史、宮柊二ほか

* 口語短歌

鳴海要吉、石川啄木ほか

* アイヌの歌人

バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市ほか

〈北海道の俳句〉〔木村敏男〕

* 北方俳句の夜明け

松窓乙二、河東碧梧桐、牛島藤六、高浜虚子、長谷川零餘子、白田亜浪、石田雨圃子、青木郭公ほか

* 俳句近代化への潮流

荻原井泉水、泉天郎、長谷部虎杖子、唐笠何蝶、細谷源二、土岐鍊太郎、伊藤凍魚、水野波陣洞ほか

* 花ひらく北の俳句

斎藤玄、寺田京子、比良暮雪、佐々木丁冬ほか

* 俳句の現代

比良暮雪、佐々木丁冬、鮫島交魚子、園田夢蒼花、山岸巨狼ほか

〈アイヌの口承文芸〉〔藤本英夫〕

金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦、金成マツ、知里幸恵、萱野茂

〈北海道の川柳〉〔斎藤大雄〕

* 明治～昭和前期

鈴木青柳、北村白眼子、亀井花童子、神尾三休、三輪破魔杖、井上剣花坊、鶴彬、西嶋〇丸、
田中五呂八ほか

* 昭和後期～平成7年

西村欣童、高木夢二郎、森田一二、甲野狂水、古田八白子

* 北海道の川柳社

道央、道南、道東、道北の各結社の活動と結社誌等を紹介。

〈北海道の児童文学〉〔柴村紀代〕

* 明治～昭和20年代

伊東音次郎、支部沈黙、坪松一郎ほか

* 昭和30年代

石森延男、神沢利子、安藤美紀夫、渡辺ひろし、玉川雄介ほか

* 昭和40年代以降

加藤多一、後藤竜二、長野京子ほか

〈千島・樺太の文学〉〔木原直彦〕

夏堀正元、吉村昭、李恢成、寒川光太郎ほか

(2) 特別企画展

● 「夏目漱石と芥川龍之介」

会 期 平成11年8月7日(土)～9月5日(日) (26日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 3,820人

特別企画展「夏目漱石と芥川龍之介」は日本近代文学館（東京）収蔵の資料を中心に、東京都近代文学博物館、神奈川近代文学館など六機関・四氏の協力により実現したもので、重文級の逸品を数多く公開した。漱石、芥川が小説家として卓越した技量を備えていたばかりでなく、書や絵画にも大きな関心を寄せ、それぞれに個性あふれる「作品」をのこしたことを明らかにする展示内容となった。また、両者の俳句短冊や、二人の文豪の著書を装丁した橋口五葉や津田青楓、小穴隆一などの装丁原画などにも関心が集まった。

また、漱石と芥川の交流を示す書簡や二人の交友圏の広さと足跡を表わす書簡、葉書、日常に使用していた遺品などに見入る人々も多く、二人の文豪とその文学世界への関心の高さがうかがわれた。

● 「〈本〉はどこに向かうのか～活字本からデジタルへ～」

会 期 平成11年9月25日(土)～12月5日(日) (58日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,196人

コンピュータやインターネットの普及にともない、活版印刷を継承してきた本の世界も大きな変革期を迎えている。本が手元に届くまでには、まず「書く」という行為があり、その後編集・印刷、流通・販売という過程を経る。現代では、ワード・プロセッサで「書く」ことが普通となり、編集・印刷も含めて多くの作業がコンピュータ上でなされるようになってきている。本特別企画展では、本の過去、現在、未来の紹介を通じて、デジタル化の進む社会と「本」とのかかわりを追求した。

展示会場では、入館者がCD-ROM上の電子書籍やインターネット上で公開されている文学作品を、コンピュータを操作しながら実体験できるようにしたほか、軽印刷（はがき印刷）による活版印刷の実演、ガリ版印刷の体験、DTP（デスクトップ・パブリッシング）印刷の実演など、体験型の展示方法とした。体験を通じて印刷の歴史をふりかえり、コンピュータネットワークを通じた最新の書籍情報に触れることのできる工夫が、入館者の驚きと好評を呼んだ。

●所蔵品展「本庄陸男と『石狩川』」

会 期 平成11年 5月1日(土)～6月20日(日) (41日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 1,363人

本企画展では、当別での誕生から小説『石狩川』第1部を出版してまもなく他界するまでの本庄陸男の生涯と、代表作『石狩川』と史実との照応関係に焦点をしばった展示を行った。山田昭夫前藤女子大教授から借用した「白い壁」をはじめとする多くの直筆原稿は、昭和初頭の困難な時代状況のなかで苦闘した本庄の創作過程をうかがわせるものであり、また、会期中に展示した米国メリーランド大学プランゲ文庫蔵の『石狩川』G HQ検閲用稿本は占領下日本の検閲の実態を知る貴重な資料として反響を呼んだ。

企画展の実施に際し、現在刊行中の本庄全集にかかわる八子政信氏から「本庄陸男作品年譜」の提供を受けただけでなく、坂田資宏氏による文芸セミナー、『石狩川』を原作とする映画「大地の侍」(昭和31年)の上映会、工藤正廣氏を講師としておこなった「一日全講 『石狩川』を読む」などを行い、それぞれ予想をこえた盛況ぶりであった。

※ 企画展「北欧叙事詩『カレワラ』の光彩～中野北溟の書作による神話世界～」

会 期 平成11年 9月8日(水)～9月19日(日) (11日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 1,939人

本企画展は、北欧のフィンランドに古代から伝わり、今なお国民に広く愛唱されている叙事詩「カレワラ」の詩篇(小泉保 訳)を書きによって表現した中野北溟氏(書家、札幌市在住)のダイナミックな作品30点余りを中心に構成したもので、11日間の会期中に千人を超える入館者があった。中野氏は、この企画展がもとで先ごろ毎日芸術賞を受賞している。また、企画展と同名の氏の作品集(財団法人北海道文学館編集)も刊行され、好評を得た。

※ 企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌～〈視る詩〉の場所へ～^{トボス}」

会 期 平成12年 2月5日(土)～2月17日(木) (10日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 561人

高橋昭八郎氏(詩人、佐賀県在住)を委員長とする実行委員会との共催として実施された企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌～〈視る詩〉の場所へ～^{トボス}」では、「ヴィジュアル・ポエトリー」(視る詩、あるいは視覚詩)を手がける国内の詩人たちのほかイタリア、フランス、ドイツなど海外6カ国の詩人の作品を展示した。ゲストとして出品した山口昌男氏らのドローイングやインスタレーションも含め、130点余りの多彩な作品で構成され、詩とアートの交響空間となった特別展示室は10日間で600人近くの入館者を迎えることができた。

(3) ファミリー文学館

●夏休みファミリー文学館「ぼくもわたしも絵本作家」(ワークショップ)

会 期	平成11年7月25日(日)～7月30日(金)(4日間)
会 場	北海道立文学館講堂
講 師	萩原睦子氏(手作り絵本作家)
参加者	38人

手作り絵本のワークショップ「ぼくもわたしも絵本作家」は、参加する子どもたちが自ら主役となって、世界に一つしかない自分だけの手作り絵本をつくることを目的として実施され、札幌市在住の手作り絵本作家萩原睦子氏の指導のもとに小学校3・4年生の部、5・6年生の部とに分かれ、オリエンテーションを含めそれぞれ3日間の日程で、絵本の完成をめざした。また、完成した作品は冬休みファミリー文学館「たかどのほうこ・子どもの本の世界」にあわせて展示された。

●冬休みファミリー文学館「たかどのほうこ・子どもの本の世界」(絵本原画展)

会 期	平成12年1月8日(土)～1月23日(日)(14日間)
会 場	北海道立文学館特別展示室
入場者	1,076人

冬休みファミリー文学館は「たかどのほうこ・子どもの本の世界」と題して、札幌市在住の絵本、児童文学作家高樓方子氏の絵本原画展を開催した。100点余りの原画に加え、地域の開放図書館ボランティアの方々によって、手作りのアクセサリー等による会場の装飾が行われ、親しみやすい雰囲気作りがなされた。また、会期中には、4回にわたり展示室内で高樓作品の読み聞かせ会や子どもカルタ会が行われ、冬休み期間ということもあり、連日、子どもたちの歓声が絶えなかった。

<付帯事業>

●わくわく・へんてこランド(わくわく・子どもランド冬休みスペシャルとして実施)

期 日	平成12年1月16日(日)
会 場	北海道立文学館講堂
入場者	351人
出 演	高樓方子、岸田典大

わくわく・へんてこランドは、作者高樓方子氏による自著絵本朗読、および千歳市在住の絵本パフォーマー岸田典大氏の絵本読み聞かせパフォーマンスで構成した。絵本朗読の場面では、スクリーンにその頁を写し出す試みがなされ、入場者の好評を得た。また、事業終了後、地階ロビーにて作者のサイン会を行った。

(4) わくわく・子どもランド（「母と子の文学のつどい」を改称）

※～わくわく～こどもランド

会 期	平成11年5月～平成12年3月（毎月第2土曜日 11回実施）
会 場	北海道立文学館講堂
参加者	981人
出 演	人形劇団「豆の木」、「おはなしなあに」ほか

わくわく・子どもランドは、平成11年5月から平成12年3月まで、毎月の第2土曜日を中心に11回の催しを行った。内容も、絵本読み聞かせ、パネルシアター、ボードビル、人形劇、腹話術などバラエティーに富んだものを、地域のボランティアサークル等の協力で実施でき、毎回多くの子どもたちや付き添いのご両親に楽しんでいただくことができた。

2 講演会・講座等事業

(1) 文芸講演会

●演 題	「夏目漱石と世紀末」
講 師	小森 陽一（東京大学教授）
日 時	平成11年8月7日（土）午後2時
会 場	北海道立近代美術館講堂
聴講者	312人
●演 題	「マー兄ちゃんのちょっといい話」
講 師	北野 大（淑徳大学教授）
日 時	平成11年9月29日（水）午後6時
会 場	ホテル・ライフオーブ札幌ホール
聴講者	450人

(2) 特別講演会

※演 題	「歴史の舞台と私」
講 師	吉村 昭（小説家）
日 時	平成11年10月22日（金）午後6時
会 場	函館市芸術ホール
聴講者	525人
※演 題	「開拓地の思想」
講 師	池澤夏樹（小説家）
日 時	平成11年11月19日（金）午後6時
会 場	旭川市大雪クリスタルホール
聴講者	213人

(3) 文芸セミナー（会場は、特記したものの他はいずれも北海道立文学館講堂）

- 演 題 「岩出山士族の自費移住について」
講 師 坂田資宏（歌人）
日 時 平成11年5月22日（土）午後2時
聴講者 163人

- 演 題 「アイヌ語・言葉の位牌を背負ったものの一人として」
講 師 萱野 茂（萱野茂二風谷アイヌ資料館館長）
日 時 平成11年7月17日（土）午後2時
聴講者 74人

- 演 題 「展示解説 デジタル化する〈本〉の世界」
講 師 青柳文吉（当館学芸員）
日 時 平成11年10月16日（土）、11月3日（水）ともに午後2時
会 場 北海道立文学館特別展示室
聴講者 42人

- 演 題 「伝統川柳と現代川柳のはざま」
講 師 斎藤大雄（川柳作家）
日 時 平成12年2月5日（土）午後2時
聴講者 114人

(4) 文芸講座等

- ※ 演 題 「一日全講 本庄陸男『石狩川』を読む」
講 師 工藤正廣（北海道大学教授）
日 時 平成11年6月6日（日）午前10時
聴講者 35人

- ※ 演 題 「『我が輩は猫である』と夏目漱石」
講 師 高橋康雄（札幌大学教授）
日 時 平成11年8月28日（日）
聴講者 116人

- ※ 演 題 「カレワラ…北の風土から芽ぶくもの」
講 師 原子 修（札幌大学教授）
日 時 平成11年9月12日（日）午後2時
聴講者 137人

※演 題 「対論〈視覚〉の時代を越えて…」
対談者 ①山口昌男（札幌大学学長）・村上善男（美術家・詩人）
②支倉隆子（詩人）・野坂政司（北海道大学教授）
日 時 平成12年2月6日(日)午後1時30分
聴講者 61人

(5) 映像作品鑑賞のつどい

●作品名 「大地の侍」
日 時 平成11年6月5日(土)／6月19日(土)午後2時
入場者 122人／145人

●作品名 「それから」
日 時 平成11年11月20日(土)午後2時
入場者 72人

●作品名 「南京の基督」
日 時 平成11年11月27日(土)午後2時
入場者 110人

(6) ロビーコンサート

※内 容 Baker Street X'mas Live（ジャズ演奏と原詩朗読）
日 時 平成11年12月18日(土)午後6時
会 場 北海道立文学館地階ロビー
出 演 碓昭一郎とThe Baker Street
原詩朗読 熊谷ユリヤ（札幌大学助教授）
入場者 60人

III 北海道文学に関する調査研究事業

寄附行為第4条第3号に掲げる事業は、次のとおり行った。（いずれも国内）

- 本庄陸男関連資料調査
- 和田徹三資料調査
- 更科源蔵資料調査
- 立原道造記念館等資料受入、整理実態調査
- 特別企画展、企画展の図録・リーフレット作成
- 高橋留治文庫目録作成に関わる調査

IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業

寄附行為第4条第4号に掲げる事業は、次のとおり行った。

次の団体の事業に対して、後援名義並びに主催名義の使用を承認して支援した。

- 星座の会
文学講演会（3回）
（平成11年7月3日、9月18日、10月3日 北海道立文学館講堂）
- 斎藤茂吉記念中川町短歌フェスティバル実行委員会
「斎藤茂吉記念第6回中川町短歌フェスティバル99」
（平成11年9月17日、18日 中川町山村開発センター）
- NHK文化センター朗読教室（松井教室）
「北海道ゆかりの文学を読む」
（平成11年9月26日 北海道立文学館講堂）
- 日本児童文学者協会北海道支部
児童文学学校
（原則として10月～3月の第1、第3木曜日に開校 北海道立文学館講堂）
- 絵本・児童文学研究センター
「第4回文化セミナー『家族』」
（平成11年11月28日 小樽市民会館）
- 北海道新聞社
「1999 Hokkaido 読み聞かせワールド」
（平成11年11月28日 北海道立文学館講堂）
- 「金子みすゞの世界展」旭川実行委員会、朝日新聞社
「幻の童謡詩人 金子みすゞの世界展」
（平成12年1月14日～同23日 旭川市民文化会館）

V 啓発広報事業

寄附行為第4条第5号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 施設案内、常設展リーフレット、各展覧会ポスター・ちらし及び講演会・セミナーちらし等を制作、発行。
- 広報誌「サンクンガーデン」第8号（平成11年10月）、第9号（平成12年3月）の編集発行。
- ※「北海道文学館報」第50号（平成11年7月）、第51号（平成11年12月）の発行。

VI 刊行物の刊行事業

寄附行為第4条第6号に掲げる事業は次のとおり行った。

- 特別企画展「夏目漱石と芥川龍之介」図録（B5版、44頁）の刊行
- 所蔵品展「本庄陸男と『石狩川』」パンフレット及び「本庄陸男作品年譜」の刊行
- 企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌」図録（A5版、28頁）
- 『北欧叙事詩「カレワラ」の光彩』（A変形版、114頁）の刊行
- 『収蔵資料目録 高橋留治文庫』（A4版、96頁）の刊行

VII 北海道立文学館の管理運営事業

寄附行為第4条第7号による道立文学館の管理運営は、北海道と当財団との間に取り交わされた委託契約（4月1日締結）に基づき、適切に行った。

VIII その他の付帯事業

●博物館学芸員実習生の受け入れ及び実習指導

平成11年8月及び12月に各5日間（計10日間）、札幌大学学生（3人）と札幌学院大学生（2人）に対し行った。

※古書市99 文芸お楽しみバザール

平成11年9月18日（土）、19日（日） 文学館1階ロビーで実施。

- ・ミニ古書市は地階にて通年実施。ともにチャリティーバザール実行委員会（田村哲三委員長）との共催。

※印の事業は財団の独自企画のものを示す